中洌正堯著

国語科表現指導の研究

本書は、国語科における表現指導のあり方について、その広範な領域をしっかりと視野におさめ、深く追究し、確かな体系として構築していこうとする研究の書である。

その構成は、つぎのようになっている。

（野地潤家）

序

I　表現指導の基本問題

一　文章表現指導の基本問題

二　文章表現指導のカリキュラム論

三　話しことば指導の基本問題

四　話しことば指導の研究課題

II　文章表現の基底

一　「叙述」の考察――野地潤家博士の『源平桃』を対象に――

二　「推考（敲）」の考察――藤原与一博士の『方言の山野』を対象に――

三　表現吟味の基本――比べること・見通すこと――

III　表現指導の出発

一　文章表現指導の伝統と創造

二　表現指導の目標

三　表現力の措定

㈠　「書けない」ということの分析

㈡　「話す力」の評価基準

四　低学年児童の文章表現――小学校一年生の一年間の実践記録から――

五　高学年児童の文章表現――小学校五年生の課題作文「母」の分析から――

IV　表現指導の展開

一　生活文の指導

㈠　生活文指導の授業準備

㈡　生活文指導の授業過程

二　文章表現指導の開拓

㈠　「書ける」ということの分析

㈡　「書ける」世界の広がり

三　話しことば指導の開拓

㈠　伝統的方法の再生

㈡　朗読指導

四　表現指導での評価

㈠　文章表現指導での評価

㈡　自己評価への道筋

V　「文集」の理論と実践

一　「文集」活動の伝統――雑誌「綴方生活」のばあい――

二　「文集」に関する調査――鳥取県下の小学校のばあい――

三　個人文集の制作――大学での実践――

VI　地域の表現指導――「沖縄の国語教育の調査」から――

㈠　調査の概要

㈡　国語教育

㈢　書くことの教育

㈣　聞くこと・話すことの教育

㈤　読むことの教育

㈥　結語

あとがき

さくいん

第I章から第V章に至るまで、「著者は各章間に緊密なつながりを見い出し、全体として表現指導論としての力動的な編成をめざしている」（序）ものとなっている。

中洌正堯氏の表現指導論は、表現指導を、「文章表現指導」と「話しことば指導」（話しことばによる表現

の指導）とに分節して考えるが、私の中では、つねに、〈話しても、書いても〉との気もちが強い。（2ペ）

とあるように、表現指導は本来一元的なものである、という根本理念に支えられている。さらに第Ⅰ章第一節「4、構想力のこと」の中で、

国語科と他教科との有機的関連、「書くこと（作文）」と「聞くこと・話すこと・読むこと」との有機的関連、内容と形式との統一、理解と表現との一如等を、するどく組織化・構造化していく力量が問われる。

と述べているように、一元的（もちろん単純な形のものではない）な思考は、国語科のあり方、そして教育全体へと貫かれている。それは、統合体としての人間をまるごと育むことが教育の営みであるという、人間そのものを尊重する精神の現れであるとも言えよう。このことは、第Ⅱ章における文章表現そのものの精細な分析・考察の中においても、

「比べること」も「見通すこと」も、広い意味で、表現における照応を吟味することだと言ってよい。（中略）

今、私は、叙述の照応を吟味することによって、理解と表現とを一元化する道すじを見いだそうと努力する。（九五ペ）

という姿勢となって現れている。

中洌氏は、表現指導の目標を、

現実（自己および世界）を見つめ、現実をとらえ、現実を変えていくために、言語による表現を理解し、認識のしかたを身につけることによって、言語で、ものごとの本質を認識し、表現する力を育成する。（一一九ペ）

と、設定する。つまり、そのような表現する力をもつ言語生活者を育成する、ということである。この力については、

指導者が、自己の「表現生活」「読書生活」を内省し、よりすぐれた「表現生活者」「読書生活者」を志向することは、ただちに、学習者の「表現生活」「読書生活」の育成のための教室営為にはねかえってくるのである。（七ペ）

というように、指導者にとっても、自ら高めていくことが肝要であることを説いている。また、「一方では『子どもの文化』を産出していく」（一一九ペ）ものでもある。

文集は、「子どもの文化」として結実した成果である。中洌氏は、文集活動の問題として、

それらの文集が、つぎの実践に生かされていくといった、いわば教育の科学としての実践が乏しかったことにある。（八ペ）

を指摘し、通時論的・共時論的研究をふまえて、自らの実践を提出することで、その克服の方途を示している。（第Ⅴ章）

話しことば指導における「演劇的教育方法」の提唱、児童の文章表現力の実証的な把握、「生活文」指導についての独自の総合的考察、氏の「国語教育研究の出発となった」（二九八ペ）地域の表現指導に関する調査研究など、ここでは紹介しきれない豊かで、鋭く、示唆深い論考がある。

常に伝統に学びつつ、独自の理論を組み立て、さらに実践へと実らせていく、研究（実践）者としてすぐれた「表現生活者」であることを伺わせる。

（A5判、三五〇ページ、昭和六十一年三月一日、溪水社刊、三、五〇〇円、普及判、二、五〇〇円）

（牧戸　章）